

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）大学院学生研究2025年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科 比較文明学専攻	
研究代表者 (2026年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏 名		
	☐ 博士前期課程 年 ☒ 博士後期課程 1 年		田村 奏天		
指導教員	所属部局・職名		氏 名		
	文学部・教授		蜂飼 耳		
自然・人文・社会の別	自然	・ ☐ 人文	・ 社会	個人・共同の別	☐ 個人 ・ 共同 名
研究課題	新興俳句はどう語られたか――戦後期における新興俳句の批判と継承				
研究組織 (共同研究者が いる場合のみ、 2026年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・課程・学年			氏 名	
研究期間	2025 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円				

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

当該研究の研究目的を含むこと。

新興俳句とは、1930年代初頭から1940年代初頭にかけて起こった文学運動である。新興俳句は、反伝統を掲げ、抒情の回復と新たな俳句表現の創造を希求する運動として勃興し、同時代の社会情勢と結びつくことで反戦的な表現を取り込みながら発展した。

本研究では、戦中の影響が色濃く反映されたこの運動について、その下支えとなった社会的背景を脱した戦後期、とりわけ1940年代から50年代にかけて、どのように議論され、位置付けられてきたのかを検討することで、新興俳句の表現における影響と、運動的側面への評価について明らかにした。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

〔 『天狼』 〕 〔 新興俳句 〕 〔 根源俳句 〕

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか (できなかったのか)。
 - ・何をもって研究成果 (経過) を達成できた (できなかった) と考えられるのか。
- 自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

1. 研究目的と背景

本研究の目的は、1940 年代後半から 50 年代前半にかけての俳誌に掲載された、新興俳句に関する評論を分析することで、〔①新興俳句における表現改革は戦後期の俳句表現にどのような影響を与えたのか〕と〔②新興俳句の運動的側面に対して戦後俳壇はどのように向き合ったのか〕の二点について検討することであった。

新興俳句は戦中日本の軍国主義化にともなって反戦表現と結びつき発展していく。その結果として、京大俳句事件において多数の作家が検挙された。既存の研究では、この一連の事件によって新興俳句は一旦の収束を迎え、終戦に至るまで俳句史は空白を迎えたとされる。しかし、戦前と戦後は決して断裂したものではない。富澤赤黄男や三橋敏雄など、新興俳句のうちに位置付けられた作家は戦後期にも多く活躍しており、戦後期の俳壇情勢は、新たな世代へと移行したと捉えるよりも、むしろ新興俳句に位置付けられた作家たちが、それぞれに自らの立ち位置を変化させた結果だと捉えるべきだ。そして、このとき戦後の俳句作家たちは、自らを同時代の俳壇に位置付け直すために、新興俳句に対して常に眼差しを向けていたはずだ。であれば、戦後の俳誌における俳句評論のうちには、新興俳句への内省を見ることができると判断するのが妥当である。

以上のような見立てから、本研究では戦後の俳誌のうち、『天狼』を分析対象として定めた。『天狼』は山口誓子主宰の俳誌であるが、その創刊には西東三鬼が大きく携わっており、結果としてその実情は、誓子門下の『馬酔木』作家と、『京大俳句』作家の野合であった。この点に加えて、創刊時の同人に新興俳句に位置付けられる作家が多く見られることから、新興俳句と『天狼』との接続は明らかだ。他方で、『天狼』は根源俳句を提唱し、理念の軸に据えて発展していく。根源俳句は主に即物俳句を目指した理論であり、結果として客観写生と親和性の高い表現理念に至る。これは、イメージとしての言葉を重視し、反客観写生・反花鳥諷詠を主軸に発展した新興俳句とは大きく異なっている。そのため、『天狼』の評論からは、新興俳句への内省を見ることができると捉えられる。本研究が試みるのは、『天狼』の、とりわけ山口誓子・西東三鬼・平畑静塔・秋元不死男らの言説における新興俳句の扱いを検証することで、上記の二つの問いを詳らかにすることにある。

2. 研究内容

本研究では、俳句文学館に所蔵されている『天狼』を用い、創刊の 1948 年から、根源俳句が一旦の終結を迎えた 1955 年にかけて掲載された評論を対象に分析した。【1. 研究目的と背景】に提示した 4 名の作家の評論について、作家論、時評、作品評の中から、新興俳句に関わる言説を網羅的に検証した結果、〈精神〉・〈文学〉・〈定型〉という三つの術語によって、『天狼』作家が新興俳句と自らを差異化しようと試みたことが詳らかになった。

そこで、本研究では、各評論をこれらの術語を通じて重ねて読解することで、『天狼』における俳句観を整理し、①新興俳句が〈文学〉的な俳句を目指す中で取り入れてきた表現手法をどのように批判することで、根源俳句を〈定型〉に即した理念として定立しようとしたか精査した。加えて、②新興俳句が社会運動として発展していくなかで取り入れた〈批判精神〉について、どのような評価を下していたか精査した。新興俳句への反省と評価を繰り返す戦後当時の『天狼』を眺望することで、新興俳句と戦後俳句の間に断裂を見る俳句史観に対し、批判的に検討することが可能であると同時に、新興俳句の表現史的な意義を再検討することが可能であると考えた。

研究成果の概要 (つづき)

3. 研究成果と考察

【1. 研究目的と背景】【2. 研究内容】に提示した研究を実施した結果、次のような成果を得ることができた。

①『天狼』における新興俳句に対する内省

『天狼』は創刊当時、すなわち戦後の俳壇情勢が混沌の極みであったとし、その原因を、新興俳句による「俳句の拡充」にあるとした。新興俳句が〈文学〉としての俳句を希求する中で、非俳句的なものまでも俳句と名指してしまったとするのである。加えて、戦後俳句における〈文学〉は、第二芸術論の影響によって俳句が乗り越えるべきものとしても捉えられていた。そのため、『天狼』は新興俳句による「俳句の拡充」を批判的に省み、他の〈文学〉と差別化を図ることによって俳句形式の特殊性を解明しようと試みるようになった。ただし、このとき、『天狼』が〈文学〉と名指したものはあくまで『天狼』にとって「非俳句的」なものでしかなく、『天狼』は俳句がその定型ゆえに不可能である要素をまとめて退けるために〈文学〉という一語を用いていた。

しかし、ここで重要なのは、まとめて退けた〈文学〉と俳句とを差別化しようとするとき、そこに『天狼』が新興俳句に見た〈批判精神〉と同様の理念が立ち現れていることである。『天狼』による新興俳句の内省のうちでは、「俳句の拡充」は新興俳句が〈批判精神〉を高浜虚子ら伝統派の俳句に向けることで可能にしたとされる。とりわけ平畑静塔はこの新興俳句の〈批判精神〉を批判的に評価しているが、静塔の俳論を眺望すれば、それは完全に退けるものではない。『天狼』はむしろ、その〈批判精神〉の矛先を伝統派から〈文学〉へと挿げ替えることで、新興俳句が伝統派へ向けた眼差しを捨象しながら、自らを戦後期の「新たな伝統」へと位置づけ直そうとしたのである。

②根源俳句における〈精神〉の語の内実

新興俳句に対する内省の結果として、『天狼』の根源俳句は虚子的な理念に接近しながら、〈精神〉を前景化させた議論を展開していく。ここで述べられている〈精神〉とはすなわち、定型を選びとるという〈精神〉である。ただし、定型の存在は、それによって叙情詩としての俳句の限界が指摘されたことや、それが「古さ」と称されることも含めて、それ自体が俳句に対する諦念でもあろう。しかし、『天狼』はむしろその諦念を自覚的に選び取ったという〈精神〉を重視することでこの諦念を乗り越えようとした。

『天狼』と同時代の俳句批評において、主宰の山口誓子と他の『天狼』作家の理念に差異が見られることが指摘されていた。しかし、新興俳句や根源俳句について詳細な明言を避ける誓子の、その〈精神〉をいかに読みとくか、という点において誓子と『天狼』作家はつながっている。その結果生み出されたものこそ、定型という諦念である。加えて、〈文学〉への〈批判精神〉を、定型という諦念に見た『天狼』は、定型という破ることの出来ない、言い換えれば俳句にとってあまりに当然の共通性を俳句的と見なすことによって、むしろ新興俳句にとって批判対象であった「ホトトギス」の思想と接続されたのである。

本研究の成果は、以上の二つの観点によって新興俳句から戦後俳句までの俳句史を整理し、接続したという点において、新興俳句研究、戦後俳句研究双方の基盤として機能するものであると言える。しかし一方で、本研究ではあくまで新興俳句に対する評伝を分析するにとどまり、それら理念が実際の作品と、その作品の読解にいかなる影響を与えていたかの分析までは及ばなかった。今後の研究として、本研究で析出された理論を軸として、実際の作品、とりわけ山口誓子の句集『激浪』について、『天狼』内外の受容も含めた検討が必要になるだろう。

※この(様式2)に記入の成果の公開を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

口頭発表「新興俳句から根源俳句へ——俳誌『天狼』における新興俳句の扱いをめぐって」俳文学会第76回全国大会(於: 深川江戸資料館)、2025年10月18日